

東富士演習場のススキは最高の品質である（との評価を得ているとか）ので、飛騨高山地方の合掌造りの屋根の葺き替えに珍重されているようである。冬季になると、カヤ採取のため演習場内に立ち入る地元住民が目立ってくる。生業のための立ち入りとして認められているが、これに便乗した地元外からの異邦人もおり、地元は監視を強めている。

さて、御殿場・裾野地区における冬の風物詩の一つとして、近年その存在を知られつつあるのが、東富士演習場の野焼きであろう。（勿論、北富士演習場や、全国の多くの演習場で野焼きは行われている。）初めて見た人はその大きさに圧倒され、息を呑むという。全国的には、秋吉台の野焼き（例年2月の第3日曜日、1300ha、日本一の広さ）や阿蘇の草千里の野焼き（例年3月7日）が、県内では伊東の大室山の野焼きが夙に著名であるが、東富士演習場の野焼きもそれらに次いでいると言っても過言ではない。

東富士演習場の場合、例年1月下旬に射撃による火災の多い第2目標設置区域一帯を富士学校が近隣の部隊等の協力を得て実施する「部分野焼き」と、例年2月下旬に東富士演習場入会組合が担任し、自衛隊等が協力して行う本格的な「野焼き」がある。

演習場の野焼きは、毎年1月15日に行われる東大寺、興福寺両寺の境界争いに端を発する行事（勿論異説あり）としての奈良若草山の山焼きとは、その趣旨を異にする。枯れススキに巣くう害虫を駆除し、野火が発生することを防止すると共に、焼灰によって少しでも土壌改良を図ったり、そして春先に若草が萌え出るのを促す（野焼きをやった年の山菜は品質は最高？）等の実利的な目的を持って実施されるものである。

野焼き適否の気象条件は、湿度と風速の相関によって決まる。例えば、湿度30%の場合には、風速2.2メートル以下が適し、湿度が50%程度の場合には、2級強から5級強が適している等の早見表を参考にして確定する。

野焼きの事前準備は、野焼き部分の周囲に幅30m以上の防火帯を作成することから始まる。伐採した茅を事後の火入れを考慮して配置することがポイントである。導火線が燃えていくように或いは、風上或いは地形の低い方から茅が燃え、勢いづいていくように配置する事が必要だ。

次いで、好日を選んで、人海戦術で、火をつける訳であるが、これが難しいのだそうである。先ず燃えにくい方面—即ち高所であり風下であるが—から燃やして、火が防火帯を超えて拡がることのないように安全を確保した後、頃合いを見はからって、周囲から火をつけていく。あちこちに点火するのではなく、燃えた所から逐次に拡大していくのがポイ

ントだという。

火は下から上に走り、風下には駆け足で拡がる。条件が良い日には燃え始めたら一気に火勢が強くなるのが常であり、安全の確保が絶対条件である。このため、消防車や消防隊を準備・待機させると共に常に風向に注意しつつ逃げ道を確保しておくことが重要だ。万、止むを得ず、火に回り込まれ退路を断たれたら、あなたならどうしますか。「その時は火の中に飛び込め」とも、「火の帯を突っ走れ」事が原則だそう。と言うのも、燃えさかる紅蓮の炎の向こうには既に燃え尽きた黒い茅の海が広がっている。

火をコントロール出来ることが人間の条件であり、我々は、火の習性をやはり知っておくべきである。火の恐さと火の習性を共に教えるべきだろう。火の恐さだけを教え過ぎてはいないか。最近、色々なところでバランスが欠けているようだ。また、広大は地域を野焼きする場合にはその区域を区分して飛び火及び延焼防止の処置をして野焼きを行うけれどもこれも火のコントロールの一方法である。

盂蘭盆の「迎え火」と誤解されるかも知れないが、火をコントロールする方法として迎え火というのがある。燃やしたい方向に火を誘導するためには、その方向に火を焚くと火が近寄ってくる。火が火を呼ぶ。火の上昇気流を効果的に使っているのだ。

野焼きの写真



炎の奥に見える富士山に注目

全周で一斉に火をつけるために、油に浸した綿を棒の先に巻き付けた火付け棒を使い、廃油を効果的に使いつつ火をコントロールしていく。ここで、素人と玄人の差が出る。

さて、目出度く、全周で着火、適当な風にも恵まれると火は一気に一帯を焼き尽くす。その煙は、高く立ち上る。時に航空機の航行の邪魔になるとか或いは、燃え滓が箱根、三島・沼津、小田原までや山中湖付近まで飛んできたとの苦情や臭いが堪らないとの苦情も時にある。それでも、この野焼きは必要であるし、これが富士御殿場・裾野地区の冬の一大風物詩である事には変わりがない。

野焼きが終了し、鎮火したと思っても安心は出来ない。地中にある根や可燃物が熱を持

ち、くすぶり続け、いつの間にかあちこちで火の手が上がる。残火監視が重要な所以である。一般的には、24時間は残火監視すべきである。